



日経の大手町本社に待望のコンピューター「ミニミニモデル」が運びこまれたのは、昭和四十三年九月十七日のことだった。コンピューターは、アネックス・フロシエクトの開発を進める農産部隊のスタッフたちが連日ティスカッションを続けている部屋と壁一つ

メディアの興亡

杉山隆男

メディアの興亡

杉山隆男

文藝春秋

メディアの興亡

一九八六年六月二〇日 第一刷

一九八六年九月二五日 第三刷

定価 二〇〇〇円

著者 杉山隆男

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二二三

電話(〇三)二六五―二二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

著者略歴

一九五二年十一月二十五日東京に生まれる。一九七六年一橋大学社会学部卒業。読売新聞記者を経て、現在ノンフィクションの著作に専念。

メ
デ
ィ
ア
の
興
亡

＊

目
次

ブローグ ニューヨーク 7

第一部 黎明……………29

技術後進国 30

先駆者たち 56

夢物語から 95

借金経営 120

第二部 決断……………165

スター記者 166

書かない新聞人 204

コンピューター開眼 230

専務室の晩餐 244

第三部 始 動

.....267

覆面部隊発足す 268

一億円スキヤンダル 304

顔 役 335

小さな一歩 367

第四部 試 練

.....389

W H Y、W H Y 390

組合の選択 418

解体新書 444

辛酸の日々 460

常務解任 494

最初の一枚 502

第五部 明暗

失速

536

開戦五日前

572

役員総辞職

586

功績の分配

615

第六部 離陸

テイフ

オフ

621

毎日再建

622

活字が消えた日

655

あとがき

667

535

メディアの興亡

装帧 高麗隆彦

ブ
ロ
ー
グ

ニ
ュ
ー
ヨ
ーク

三島由紀夫が割腹自殺したというニュースを、いつ、どこで、何をしている時知ったのか記憶している人は多い。

三島が、東京市ヶ谷にある陸上自衛隊東部方面総監部の本館バルコニーで「天皇陛下万歳」を叫び、その直後、二階の総監室で刃渡り二十二・五センチの短刀を下腹に突き立てたのは、昭和四十五年十一月二十五日午後零時十五分のことだった。

中曾根康弘は、第六十四臨時国会の開会式に出席したあと、平河町砂防会館の事務所でモーニングを着替えている最中に緊急事態発生の非常連絡を受け、ただちに自分が長官をつとめる六本木の防衛庁にかけつけた。川端康成は、細川護立の葬儀に参列した帰り、青山斎場の玄関で車を待っていて松本重治から変事を耳打ちされている。

共同通信では、「事件」の第一報が飛びこんできた時、年末手当の会社側回答を不満として記者をふくむ組合員が「一斉休憩」のストに入っていた。事件の取材は出足でつまずき、遅れをと

り戻そうとしたあせりから三島と一緒に割腹した「楯の会」会員森田必勝の顔写真を別の会員のものと入れ違える大失態まで演じてしまった。

一方、共同通信が国内の地方紙各社への配信に手まどっている間に、三島の死は、外電の至急^{フラッシュ}報で全世界へ打電された。

香港では夕方のラジオ・ニュースがトップで伝え、ソウルでも夕刊紙の中央日報が社会面の真ん中に「自衛隊再軍備を要求」という五段見出しをにかけて事件を大きく報じた。

パリでは、「三島切腹」のニュースは朝食時のラジオ・ニュースで飛びこんできた。「ミシマ」の名は、ヨーロッパでもノーベル文学賞の有力候補として広く知られていた。だが、彼の死が俄然マスコミの注目を浴びるようになったのは、何よりも腹を切った上、部下の男に首を刎^はねさせるといふ、そのショッキングな死に様にあった。スキヤンダルが売りものの夕刊紙にとっては格好のネタである。事実、発行部数七百万部とヨーロッパ最大の部数を誇るフランス・ソワールが五段抜きの大見出しと写真入りでセンセーショナルに報じたかと思えば、ロンドンのイブニング・スタンダードも第一面の半分をミシマのニュースに割く熱の入れようだった。

ヨーロッパと六時間の時差があるアメリカ東部では、事件の第一報は二十四日の夜十一時近く、各新聞社が翌日付朝刊の紙面づくりに躍起になっているところに入ってきた。ミシマの記事はただちに活字となって紙面に組みこまれ、輪転機はこの東洋を代表する作家の写真を載せた新聞を次々に刷り出していった。

そして、東京で、検視の終わった三島の遺体白い柩におさめられ牛込警察署の霊安室に安置された頃、ニューヨークではようやくロングアイランドの空が白みはじめ、十一月二十五日の遅い朝が訪れようとしていた。

その日、ニューヨークは前日につづいて冷えこみがきびしく、午前七時を過ぎても寒暖計は零下四度をさしたままだった。この十一月二十五日の朝、日本IBMの営業担当社員伊藤正亮は、マンハッタンのホテルの一室で目をさましている。

部屋の窓からはニューヨークのすすけた街並が見えた。視界をふさぐように林立するビル、その谷間からのぞくセントラル・パークの樹々はすっかり葉を落して、裸の梢だけになっている。見あげると、空はいちめんにぶい色の雲に覆われた冬空で、時おり雲の切れ目から洩れる薄日が、摩天楼のガラス壁面に反射して淡い光を放っていた。

伊藤はベッドの中から十一月も終りのニューヨークの寒々とした風景をながめながら、ますます気が滅入っていく自分を感じていた。

この日、伊藤は朝の九時までに国連本部の真向かいにあるIBM・WTC本社に出頭しなければならなかった。WTC、正式名称はワールド・トレード・コーポレーション。日本、フランス、ドイツなど全世界百二十六カ国に散らばるIBM海外現地会社の総元締である。

そのWTCに伊藤が出頭を命ぜられた理由、それは、日本IBMがいま社を挙げて開発を進めている一大プロジェクトにあった。このプロジェクトをめぐる、WTCやWTCの親会社にあたるIBM本社の間で採算のあわない危険な賭けからは手をひくべきだとする撤退論が急速にわきおこってきたのである。このため問題のプロジェクトを現場の第一線で推進してきた営業担当者の伊藤を召喚して、親会社のトップがじきじきに査問を行なうことになったのだ。

IBMの首脳陣が懸念を抱くのも無理はなかった。伊藤たちのプロジェクトにIBMがつぎこんだ先行投資はすでにこの年四十五年十一月の時点で四十億円にのぼり、それでもなお完成のメドさえ、はっきりとは立っていない状態だった。伊藤たちが「際限のない仕事」にのめりこんでいるのではないかという見方は、WTCだけでなく、IBM本社でもしだいに支配的になっていた。

親会社のWTCがプロジェクトの続行に「NO」のサインを出せば、たちまちこの開発計画はご破算になってしまう。日本IBMは、社長のイスを日本人が占めているとは言っても、株の100パーセントをアメリカ本国のIBMに握られた一子会社にしかならない。どんなに利益をあげようとも、極端な話、現地会社という意味では、本国にとって他の各国IBMと同じ百二十六分の一の存在なのである。

六十歳定年制をとり入れるなど日本ならではの人事管理システムを敷いたり、顧客サービスの点で自主性を発揮することはできても、大型プロジェクトの開発、重要なマーケティング戦略の立案になると、かんじんな部分はほとんど親会社WTCにお伺いを立てなければ決められないのだ。

したがって、きょうの査問会で問題のプロジェクトが親会社の重役連中から「やはり心配していた通り危ない儲け話だ」と決めつけられたら最後、せっかくきょうまで積み重ねてきた開発作業の努力もその場で水泡に帰してしまう。このプロジェクトは十年二十年先きくと生きるから今の損には目をつぶってくれ、などという論理はIBMでは通用しない。その点、伊藤たちのプロジェクトは分が悪かった。金を湯水のようにつぎこんでも、さっぱり先が見えてこない。親会社から見通しが甘すぎると非難されても、実際のところ反論するだけの材料が伊藤たちの手もとにはなかった。

査問会では、とうぜんのことながらプロジェクトの採算性に居ならぶ役員陣から容赦のない質問が浴びせられるに違いなかった。彼らの追及をいかにかわし、プロジェクトの将来性を認めさせるか。それがすべて伊藤の腕にかかっている。そう考えるだけでも、彼は気が重くなった。

洗顔をすませ身づくろいをとのえると、伊藤は気を紛らわせようとルームサービスで届けさせた朝刊を手にとった。それがニューヨーク・タイムズであることに気づいた次の瞬間、フロンティアイン題字

の下の写真が目にとまった。

まぎれもない、三島由紀夫その人だった。三島が、白ハチマキをしめ、制服に身を固めて、必死に何か叫んでいる。

いったい三島が何を、といぶかしく思っ、黒々とインクののった見出しの活字に目をやった。伊藤は思わず息をのんだ。見出しを読むより先に、肉太の活字で打たれた最後の二文字が飛びこんできたのだ。

〈Ends Life〉

三島が死んだ。しかも自衛隊に乱入して……。

伊藤は一瞬、自分が英文を読み違えたのかと思った。見出しには三島の名前はなく、ただ、〈有名作家、東京の軍隊に乱入〉としか書かれていなかったからだ。だが、すぐその下の、小さな活字でしるされた一段分の小見出しが、三島の最期を宣告でもするかのように簡潔明瞭な表現で言い切っていた。

〈Yukio Mishima—Die by Hara-Kiri〉

昭和二十年代後半、三島が「禁色」「潮騒」と立てつづけにヒット作を発表し、戦後日本文学の旗手としての名声をほしきままにしていた時期に、伊藤は鹿児島の名門ラサール高校で学んでいた。もっとも勉強よりはクラブ活動のサッカーに熱中し、グラウンドでボールを追いかける毎日を送っていた伊藤だったが、一面、本屋に行けばズラリとならんだ新刊書の中から話題の三島の本を手にとっては買い求める読書好きな高校生でもあった。やがて東京に出て大学を卒業、IBMに入社してからは三島の小説を読むこともめったになくなった。それでもボディビルに励んだり映画の中で自ら切腹シーンを演じてみせたりと、とかくマスコミに騒がれる三島の行動はどことなく気になって週刊誌に目を通すこともあったのである。ファンとまではいなくても、

三島の作品とともに確実に青春の一時期を歩んだという実感は持っていたのだった。

だが、そんな伊藤にも、三島の割腹自殺は理解しようにもしようなない、異常な出来事としてうつった。あまりに唐突すぎたし、あまりにとらえどころがなかった。タイムズの記事を読みすすんでいる間も、伊藤の脳裏からは「なぜ」という思いがつきまどって離れなかった。

東京特派員から送られてきた記事の文章は、一面のトップからはじまって真ん中ぐらいまで来たところで、突然、途切れ、〈四ページに続く〉という断り書きが添えられてあった。日本の新聞と違ってアメリカの新聞は、同じページの中に一つの記事が書き出しからラストまできっちり入っているということがほとんどない。文章の途中だろうが単語の途中だろうが、スペースがなくなれば、記事は無造作に切られてしまい、読者はわざわざ指定されたページを広げ直して、再び記事の「続き」を読み出さなければならぬ。一ページ読み切り式の日本の新聞に慣れきってしまっている日本人にはこれがなかなか厄介である。

今も三島割腹の記事は、〈He accused the Self-Defense〉というくだりで、ブツリと切れていた。伊藤は、続きの掲載してある四ページ目を広げて、再び貪るように記事を読みだした。

そして活字を追いつながら、ふと、アメリカ人ならこの三島の死をどう受けとめるだろうかと考えてみた。すると、ひとつの不安が頭をもたげてきた。それは、きょうの査問会で三島の「ハラキリ」について真っ先にたずねられるのではないかと不安だった。

ビジネスマンの朝の会話は、その日の朝刊のニュースからはじまると相場が決まっている。ニューヨークでもそれは同じだろう。とすれば、朝九時にオフィスに姿を現わした日本人に、この東京発のセンセーショナルな事件について感想を求めないはずはなかった。事件はニューヨーク・タイムズの一面を飾っている。IBMの重役連中なら目を通して当然なのである。

伊藤には、アメリカ人の多くがこの「事件」を日本人の不可解さや残虐さとかからめて考えてい

るさまが想像できた。やはり日本人のやることはわからない。彼らはどこか無気味な民族だ……。

だが、もしIBMの重役連中までそう考えているとしたら、伊藤がいま手がけているプロジェクト自体、そのような偏見の目で見られないとも限らないのだった。

プロジェクトの本身は、日本文化そのものに深くかかわっている。逆に言えば、その日本文化をアメリカ人に理解してもらうところから、このプロジェクトははじまると言っても過言ではなかった。

しかし、アメリカ人の目にさらされた日本文化のイメージは今や最悪である。日本を代表する文学者が、自ら腹を裂き首を人に落させたのだ。人々はこれこそ日本文化の典型と見るに違いなかった。彼らはとうぜん日本文化に残酷で野蛮なイメージをかぶせるであろう。文化の内容を理解しようとする前に、事件のイメージだけで、だれもが日本文化はおぞましいものとして目をそむけるに決まっていた。となれば、その野蛮な日本文化に深くかかわっているというこのプロジェクトにも、はじめから好ましくない先入観が植えつけられるのは避けられなかった。

いや、プロジェクトの本身についてどうこうケチをつけられるのなら、まだいくらかでも説得のしようがあった。問題はそれ以前である。

IBMの重役連中は、プロジェクトの本身をろくに改めることもしないで、開発続行か撤退かの最終決定を下してしまうかもしれないのだった。このプロジェクトを手がけたのは、あの三島と同じ、何をしでかすかわからない無気味な民族、日本人なんだという予断をもって、である。日本人が首頭をとって進めているプロジェクトだ、先はどう転ぶかわからんぞ。どんなにうまくいって、日本人は言っていることと、じっさいやることが違いすぎる。どこまで信用してよいものか、ともかく油断は禁物だ——そんな風に、十把ひとからげに決めつけられたら万事休すである。